

群馬県生まれ。小学校を卒業後、上京。様々な職業を経て苦勞をしてきたが、現在は二世帯住宅で暮らす。本を読むこと、文章を書くことが好きで、テレビを観ている暇もない。

「謙虚さ」とは？

愛犬が天国へ行ってしまったのが十余年前で、その明くる年のことだから、もうずい分前の話であるが決して忘れることのできない出来事だ。

朝日新聞の夕刊「窓」欄を見ていたわたしは、頭を鉄の棒でぶん殴られたようなショックに見舞われた。

それはこうだ。犬が電柱の根元に「オシッコ」をするので、電柱の腐蝕が早くて、困った電力会社が署名運動をした、というのだ。

人間というものは、自分の気が付かないところでよそさまにこのようなご迷惑をかけているのか、と尋常なおどろきではなかった。

わが家では、娘が子犬をもらってきてしまったとき、菓子折りを持って近所を八軒回った。「ご迷惑をおかけします」と。

以前、近所の犬が夜中にも鳴くのでこりごりした経験があったからだ。

ところが、よく散歩をさせ可愛がっていたので、“ダイスケ”と名付けられたわが家の愛犬はやたらと鳴かなかった。

「おくさんが回ってくださいましたが、ダイスケちゃんは、いるんだか、いないんだか分かりませんねえ」

と近所の方がおっしゃるように。

また、大の方は家へ持って帰ってきて処分していましたが、「犬を飼っていたって、わが家はだれにも迷惑をかけていない」と自惚れていたわたしは、深く考え込んでしまったのだ。

のほほんと、自分は正しく生きてきた、などと思い込んでいた

自信も危うくなり、人生感、処世感まで考え込んできた。

そして辿り着いた場所は、「謙虚」という所だった。控え目に謙虚に生きていれば、万一自分が間違いをしでかしても人は怒りをおさえてくれるだろう。

こんな簡単なことを“齢七十”にして気付くなんて・・・。なんて愚かだったのだろう。

よく、“今どきの若い者は”という声を聞くが、わたしは「そんなことはない。むしろ今どきの年寄り」を言いたい。

お医者さんの待合室での連続した大声のおしゃべり・・・。

わたしは、お医者さんに行ったときは、疲れて大声でしゃべる元気などない。長い時間大声でしゃべり合える人は、どこが悪いのだろうか、と思う。

バスの中でもそうだ。わたしは武蔵村山市から立川までよくバスに乗るのだが、ここでもまた、大声のおしゃべりが続き、うんざりする。

今、高齢者、そして医療問題が話題になっているが、待合室で大声でしゃべり続けられる年寄りを抱えている国も大変だと思う。

年寄りは、若者の手本にならなくてはならないとわたしは思う。お医者さんの待合室でしゃべり合うのが楽しみでくるのだ、と看護師さんがおっしゃったが、自分で楽しみを見つけて人さまに迷惑をかけないように生きるのが年寄りの義務だと思う。でも立派なことは言えない。自分も犬を飼っていても誰にも迷惑をかけていない、と思っていたのだから。

おわり